

〈私の書評〉

高坂正堯著 「政治的思考の復権」



なか
じま
みね
お
中嶋嶺雄

東京外国語大学助教授

宇宙中継のテレビで刻々と映し出される米中両首脳「結合」ぶりを見ていて、多くの日本国民はどんな感じをもっただろうか。一部の単純で直情的な、どうしようもない人びとを除いて、多くの国民は、何か割り切れない感情を抱き、ただ拍手だけを送ってはいられないような、ある種の不快感というのか疎外感というのか、そんな気持ちにおそわれたのではないかと思う。同時に、心のどこかで、日本は要するにアメリカとも中国ともちがうのだ、ということをも感じたと人びとも多いにちがいない。私は、それがむしろまともな反応だと思ふ。

本書は、そのようなまともな日本人が、世界と日本の政治の動きを、複雑な世界の変化に耐えてできるだけ論理的かつ冷静に

考えてゆくための思考態度を、平易な文章と高い論理性のなかで、教え、説いている。高坂氏は、広い国際的な視野と鋭い現実感覚のなかに身を置く国際政治学者でありながら、あたりまえのことを、あたりまえに述べて、しかも鋭く問題点をうきあがらせているのだが、このあたりまえのことがあたりまえに論じられないところに、わが国の知的世界における病理が反映していることは、いまでも言うまでもない。

「政治的思考の復権」というタイトルは、きわめて魅力的であり、また、刺激的であると同時に、ある意味では、一部のどうしようもない人びとの理解を超えた逆説を秘めている。著者は、なにも、国民がもつと政治づくことを提唱しているのでもなければ、

ば、せまい国土のなかでこれ以上、ギスギス、ガヤガヤするようすすめているわけでも決してない。本当の政治とはなにかを考えようとしないう「政治的思考」の欠如こそ、実は政治を冒とくし、ジョージ・オーエルやハックスレーがかつて予言した、社会の破壊をもたらしかねないことを鋭く警告しているのである。その意味で本書は、通俗的な政治の横行を鋭く批判して本来の「政治」の擁護を高く唱えたB・クリックの名著『政治の擁護』に比肩する意味をもっている。

本書はⅠ「変化する世界と日本」、Ⅱ「日本人の政治意識とその根源」、Ⅲ「変動の時代への視角」の三部から成っており、著者がこの数年間に発表した十篇の論文を新たに練り直して収めている。大別すると、日本人の政治意識を論じたエッセイと、国際政治を論じたエッセイとに分かれているが、いずれも、私にとつては発表時に大いに啓発されたものばかりである。巻頭の「退屈な時代とその反抗者」は、三島事件に際して書かれたものであり、現代は、「豊かさの退屈」と「平和の退屈」が支配しているのみか、「政治における『ロマン』」の時代が終つ

新鋭書下ろし作品

●第3作／発売！ 価680円

丸山健二
黒い海への訪問者

日常生活に訣別した青年の長い船旅

勤務先には休暇届を出し、家族には出張と偽って、アラビヤへ出港する二十万噸のタンカーに乗船した一青年は、広大な海に何を託そうとしたのだろうか。現代青年の孤絶した心情を運ぶ長い航海の軌跡をたどる。

た」時代だとして、そうした時代には内外ともに偽善が支配することを指摘し、それがわが国では「自主性を口にする集團主義」、「決意なき革命論議」、「道義なき平和国家」という形態で特にはなはだしく現われていることを鮮かに描き出している。三島由紀夫は、こうした偽善を激しく衝いた。だが同時に、彼自身、「自己顕示欲の政治」という現代の恐るべきもうひとつの傾向の犠牲者ではなかったかと、著者は、三島の政治構造における「政治的思考」の欠如を結論づけている。この論文に対するものとしてⅢに収められているのが「政治」からの後退」という珠玉のようなエッセイである。B・クリックとの比較は、このエッセイに關して最もふさわしいが、私はこのエッセ

イを、たまたま香港に住んでいて、中国のこと、日本のことを別の角度から考えていた時、きわめて印象ぶかく読んだ記憶がある。著者は、日本人の政治的気まぐれに着目しながらも、「政治への倦怠」は救いになることだとみなし、政治にすべてをぶちこんで政治を万能視するのではなく「政治の領域を意識的に限る必要」を説いている。実は、中国人こそ、このような「政治的思考」を本能的に共有していると思うのだが、このエッセイは、中国人の政治意識をその深層において考えるうえでも興味深い。本書のなかの国際政治にかんするエッセイにふれる余裕はなくなってしまうたが、中国の政治や外交についての著者の理解も正鵠を射ていると思う。著者のよう

に、あるいはタヒチ島で、あるいはオーストラリアで、あるいはヨーロッパやアメリカで、中国のことをおそろろかなり「気まぐれ」に考えながら、このように正しい理解ができる秘密はなにか。そこには著者の内部における「政治」からの後退のよい効果が作用しているようにも思われる。私は、本書のなかでは、国際政治を論じたものよりも日本人の政治意識を論じたものの方を高く評価するが、本書には、日米關係をはじめ、著者の得意とする戦後日本の政治過程（占領）を論じたもの、日本外交の進路を論じたものなど著者の本来の領域に属するエッセイも収められていきわめて味わい深い。

二七七頁 七〇〇円 文芸春秋社

●既刊2冊／好評発売中！

荒地を旅する者たち

加賀乙彦著 価730円

太陽よ、怒りを照らせ

佐江衆一著 価730円

新潮社 東京 308番
編集 東京 308番
郵政 東京 308番
都営 東京 308番
都交 東京 308番
都営 東京 308番